

都市祭礼は「何を」競い合っているのか？

長浜曳山祭の子ども歌舞伎（狂言）へのまなざしを手がかりとして

滋賀県立大学 武田俊輔

1. 目的

都市祭礼においては、各祭礼組織が所有する山車や披露する芸能等を媒介とした競争関係が発生しており、近年そうした関係性を分析した研究が幾つか生まれている。ただしそうした競合関係はそれをまなざして評価する観客の存在によって可能なものにもかかわらず、従来の都市祭礼研究ではそのまなざしの内実とその祭礼への作用を十分に論じていない。本報告では競争関係を楽しむ地元の観客たちの評価のまなざしのあり方とそれを踏まえた祭礼組織の振る舞い、評価の間差しが競合関係に作用してその増幅に関わる仕組みを分析し、上記の点について明らかにする。

2. 方法

本報告では、滋賀県長浜市の中心市街地で毎年4月に執行される長浜曳山祭を分析対象とする。祭礼は山組と呼ばれる江戸時代の長浜 52 か町に基盤を持つ「山組」と呼ばれる地縁組織によって行われ、12 の山組が交代で3年に1度、それぞれ所有する曳山（山車）の上で「出番」として子ども歌舞伎（狂言）を披露する（それ以外の山組は「暇番」と呼ぶ）。狂言の準備は主に、学卒後45歳前後までの男性である「若衆」によって行われる。報告者は2012年から3年間、ある山組の若衆として祭礼の準備から当日までを経験し、他に6つの山組の祭礼の準備と当日について参与観察を行った。また2011年～2016年にかけて断続的にインタビューを行っている。

3. 結果

特に暇番山組の観客や、山組外であっても地元で毎年祭礼を見物する観客たちにとって、各山組の狂言や役者は注目の的である。ただしそれは狂言や役者といった芝居そのものの出来だけを見ているわけではない。それは同時に、裏方として芝居をサポートする若衆の段取りの良し悪し、動きやかけ声や表情、またそうした姿の背後に透かし見られる、若衆同士の意思統一の状況、資金集めを可能とする社会関係資本の有無、祭礼に関する諸知識の理解と伝承といった、準備の段階や日常に向けられている。いわば狂言の「舞台裏」のはずのものが、狂言そのものと渾然一体になったメインステージとしてまなざされ、噂話として語られて広がり、出番山組の耳にも届く。

4. 結論

その意味で暇番や地元の観客たちは、当日の山車や芸能のみに向けた外部からのまなざしとは違った形でメインステージを見出しており、準備や日常の評価も含めた形で山組間の競争関係やそれをめぐる楽しみが成立している。そして暇番山組の担い手たちは観客としての経験を踏まえて自らの出番の祭礼を再帰的に捉え直している。担い手たちは、準備はもちろん日常的な町内の関係性もまた祭礼と結びつけた意味合いを帯びたものとして意味づけ、それに対する観客のまなざしや各山組を越えて広がる噂話の影響を意識して振る舞うのである。

文献

武田俊輔, 2016a, 「都市祭礼におけるコンフリクトと高揚—長浜曳山祭における山組組織を事例として—」『生活学論叢』(28):17-29.

———, 2016b, 「都市祭礼における社会関係資本の活用と顕示—長浜曳山祭における若衆たちの資金調達プロセスを手がかりとして—」『フォーラム現代社会学』(15)18-31.